小さき声のカノン
――選択する人々

著名人からのメッセージ

※順不同、敬称略（2015.2.19 現在）

小さくてとても大きな作品です。
僕も家族で自主避難しています。
子どもを心配して揺れ動く心に自分を重ねて涙しました。
正義を掲げても傷つくし、自分自身をなかなか肯定出来ない。
やっとのことで振りしぼった勇気を使えば孤独になります。
だけどお母さんは強い。ただのお母さんだから強い。
政治家も企業人もただのお母さん、お父さんになったらいい。
誰かを傷つけやしないかと行き場を失った優しさが
日本にはいっぱいごろごろ転がってるはず。
そんな気持ちを集めて、大きなうねりとなって社会を揺り動かす力になる
「小さき声のカノン」の夢をみんなで見たいですね。

— 丹下紘希（映像監督/アート・ディレクター/人間）

鎌仲ひとみ監督の過去作、『ヒバクシャ』『六ヶ所村ラプソディー』『ミツバチの羽音と地球の回転』
僕にとっては、これらの作品を観た事が原発立地へ足を運ぶ切っ掛けになった。
311 以前、鎌仲作品に目を覚まされて原発について考え始めた人は多いと思う。

そして起るべくして起ったかのような原発事故。作るべくして鎌仲さんは『小さき声のカノン』を作った。
こういう作品を作らなくてはならない未来を避けたくてこれまでの作品を作ってきたが、
事故が起きてしまった後の希望をいち早く見出せるのもこれまでの視点があったから。

大きな政治や経済の話の中で、福島で生活を営むお母さんたちの小さな声に耳を澄ましていきたい。
大切な事が聞こえてくる。
放射線への恐れから先の世界に生きる母と子たちの姿を描いたこのドキュメンタリーが、
国内はもとより、日本で今起きている現実として世界に伝わる事を願っています。

— 三宅洋平（ミュージシャン）

まほろばだより
No.4111 15-86 6/5

4 年が経ち、
「たいしたことなかったね」とでもいうかのように
事故の影響を軽視する空気を感じています。

希望を持つことはとても大切ですが、希望的観測ではなく
きちんと事実をよりわけて物事を見つめていくことが大切だと
この映画をきっかけにあらためて考えました。

— もんじゅくん（高速増殖炉もんじゅの非公式ゆるキャラ）

国や行政が子供たちを守らないなら、自分たちで子供たちを守るしかない。
そう思って動き出したお母さんたちが本当に凄い！
もろいのに強い。小さいのに大きい。犠牲者でありながら救済者。
とてつもない逆境の中だからこそ生まれた、人と人のつながり。可能性。
普通なら相反した色んなものがごっちゃになって、カノンを作り出している。

— 想田和弘（映画作家）

科学が立証していないことって案外多いですよね。
はっきり言えば、この世界のほとんどを僕たちの科学は知らない。
また、いつでも科学者が僕らの味方だとは限らないのは、
原発事故以前の、原子力に携わる科学者たちの振る舞いが端的に表していると思います。

僕はこの映画が、たとえばどこかの家族を、仲間たちを、地域を、故郷を、
真っ二つに分断しないための助けであることを願います。
だってもう、僕らは十分に諍いあっているじゃないですか。
不安に思う母親を嘲笑することも、
故郷を立て直そうと必死になっているひとたちに外側から辛辣な言葉を投げかけることも、
もう止めて欲しい。
そう願っている人は僕だけではないと思います。

僕はこの映画を観て、正直に言って、どんな言葉を発していいのか分かりません。
でも、もう二度と、こんな思いを誰にもさせたくないって、強く思います。

— 後藤正文（ミュージシャン） ※ASIAN KUNG-FU GENERATION

子供を持つ一人の父としてこの映画を見た。
正解を求めて戦い続ける母親達の歩み。
正解は何だろう？君ならどうする？
この映画の感想を食卓のテーブルに載せて、大切な人と未来について話をして欲しい。

— GAKU-MC（ラッパー）

立ち止まろう、しばし。そうして耳を傾けよう。
あなたの内の、「小さな声」に。あのひとの内の、「小さな声」に。
喪失と悲しみと憤りの中から生まれた「小さな声」たち。
猛々しい「大きな声」と確かに対峙するためにも。
何よりも、自分自身としっかりと結びつくためにも。
いまはその言葉さえ使うことにためらいを覚える「希望」を
自らの内に紡ぎ出し、誰かと繋がるためにも。

— 落合恵子（作家、クレヨンハウス主宰）

食がいかに大切か、その事をハッキリと認識出来る映画です。
内部被ばくと言う脅威に立ち向かう
被災地の方々の戦いに胸が熱くなります。
食に不安があり、食に悩み、食に健康が脅かされている。
直面しているのは辛く悲しい現実ですが、希望もまた食にあります。
食を通して絆を深め、食によって健康を取り戻すことが出来る。
善くも悪くも食には人生と社会を変える大きな力があるのです。

— 小紺有花（麹料理研究家）

鎌仲ひとみ監督の新作『小さき声のカノン』は、
福島とチェルノブイリに住む親たちの不安、苦悩に端然と向き合い、
子どもたちの保養の大切さを説く、渾身のドキュメンタリー。加害者はどこにいて、被害者はどこにいるのか。
感じるところはさまざまだろうが、あらゆる立場の人々に観てもらいたい。

— 中川敬（ミュージシャン／ソウル・フラワー・ユニオン）

メディアも政治も経済も裏の社会で複雑に絡み合って、
全く真実が見えてこない今のこの世の中で、
「この情報だけは信じられる」「この情報こそ、本当に国民が知りたかった情報だ」と思えた、
とても真摯で温かい映像でした。

— 堀直也（エコサーファー代表）

知ってると思っていた。
が、知っていなかった。
この国は知らぬ間に絶望へ人を導いた。
しかし、絶望を希望へ、希望を実行へ、
この映画は観る人を奮い起こすだろう。
感動で泣きたい人を連れだって行こう。
知らないという人を連れだって行こう。
知ってるという人を連れだって行こう。
未来は選びとるものである。

— 高坂勝（Organic Bar たまには TSUKI でも眺めましょ 店主）

福島の汚染地で、背負いきれないほどの重荷を背負わされて生きるしかない人たち。
それでも、立ち上がって、一人ひとりが自分にできることを始めていく。
社会が変わるまでにはまだまだ長い歴史が必要だろうと私は思います。
でも、私自身も挫けずに、自分にできることを続けようと思います。

— 小出裕章（京都大学原子炉実験所助教）

日本政府が何と言おうと、行政が何と言おうと、学者が何と言おうと、
母たちは子どもを内部被ばくから守らなければならない。
この映画は、そんな母たちの諦めない闘いにより添い、見事にプラン B 案を提示する。
母たちの小さな声のカノンが、この映画でクレッシェンドになることを信じています。

— 関口祐加（映画監督）

母なるものへの希望

鎌仲ひとみ 『小さき声のカノン』監督

3.11の震災によってひき起こされた原発事故の衝撃は、凄まじいものでした。

そしてその影響は、時と共に薄れていくのではなく、この三年間、私のなかでより深く、大きなものとなっていきました。

映画監督として"核をめぐる三部作"（『ヒバクシャ』『六ヶ所村ラプソディー』『ミツバチの羽音と地球の回転』）を作り続けてきた私の願いは、「子どもたちを被ばくから守りたい」というものでした。東京電力福島第一原発事故以降、この言葉は非常な頻度で使われ、手あかがつき、陳腐化してしまったかもしれません。しかし私の中では、まったく古びることなく、未だに達成できない大きな目標として存在しています。なぜなら、今も事故前よりはるかに多く無用の被ばくを受け続けて、何も対策を施されていないこんなにも多くの子どもたちが、日常を生きることとなってしまったからです。

『ヒバクシャ』で描いた汚染地に暮らす子どもが、今、目の前にいる。
『六ヶ所村ラプソディー』で描いた原子力産業の矛盾が噴出してきた。
『ミツバチの羽音と地球の回転』で描いた原発のその先へ向かうまなざしと方法が、原発再稼働で塞がれようとしている。

そんな今、この三本の先に、今回の『小さき声のカノン』をどうしても作らなくてはならない、と私を突き動かしたもの。それは「子どもたちを被ばくから守ることができる」ことを伝えたい、という抜き差しならない思いです。

混沌と矛盾に満ちた現実に一本の糸を通す、それがドキュメンタリー映画だとしたら、今回の『小さき声のカノン』はまさしくそのような作業をした、という手応えがあります。

被ばくや汚染を認めたくない、差別されたくない人々の心理が利用され、当事者たちが自ら安全を主張する。東電も政府も責任から逃れ続ける。よじれた現実のただ中で子どもたちを心底守ろうとする母なるものの存在に私は未来をかけたい。

原発事故後の世界を生きる母たちのしなやかさ、強さ、その揺らぎや弱さまで含めて、映画から感じていただきたいと願っています。

小さき声のカノンについて

高畑勲 アニメーション映画監督

被曝線量がどのくらいでどの程度の健康被害が出るのか、個人差もあり、確実なことは誰にも言えない。しかし、原発事故後、国が許容基準を大幅にゆるめたことはまぎれもない事実である。これを理不尽と考え、心から心配し、放射能の影響から子どもを守るために、ほとんど補償も援助もないまま被曝地から避難する母親たちがいる。被曝地に留まって自主的に除染を続けつつ、食物くらい被曝していない地域のものを子どもに与えたい、また、被曝していない地域で子どもを一時的にでものびのびと「保養」させたい、――そう考え、行動する母親たちがいる。そしてそれを支援する人々がいる。遠隔地から野菜を届ける人々。保養する子どもたちを自分たちの良い環境に受け入れる人々。ベラルーシで着実な成果を上げている「保養」は、日本でも子どもたちの被曝量を確実に引き下げるのだ。

この映画にはそういう選択をした人々が描かれる。ベラルーシに学んで、でもこちらはやむをえず自主的に、行動を起こした母親たち。しかし、収入をもたらす夫、子どもの父親である夫との暮らしはどうなるのか。賛成や協力が得られるのか、私は心配になる。また、低線量に不安をつのらせるより、むしろ忘れた方がかえって前向きに生きられるのではないかと考える人の気持ちもわかる。いまや福島では、行政による除染後の被曝地を離れようとする人々や、その地の食べ物を食べたがらず、風評被害をみずから生みかねない人々を、"非国民"扱いする空気さえあると聞く。

けれども、なぜベラルーシでは国ぐるみで出来ていることが日本では出来ないのか、国や自治体は人々の"愛郷心"につけ込んで、無策を正当化しようとしているのではないか。私はやはりそこにこそ最大の問題があると感じ、映画の中の、勇気を持って立ち上がり、多くの人とは別の、希望の道をみずから切り開こうとしているごく普通のお母さんたちのけなげな姿に、心からエールを送らずにはいられなかった。頑張れ！

Photo: ©Takashi Morizumi